
虚栄都市～ヴァニティー・フェア～

富屋 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚栄都市〜ヴァニティー・フェア〜

【Nコード】

N7480Y

【作者名】

富屋 要

【あらすじ】

場所は『霧の都』。時は深夜。恋人との逢瀬の帰り、カーウィン・イムグリオイスト卿は、不審な一行を見かける。『異端審問^{インクイジション}』を称する殺人者集団である。その中にいた歳若い娘に、カーウィンの鼓動は跳ね上がる。五年前に交際していた女性、ジェシカ・アンダーソンに似ていたからだ。彼女の面影を追ううちに、若き貴族カーウィンは、『霧の都』の底に蠢くおぞましい現実を目にする。

第一話 逢瀬

豪華な部屋だった。

毛足の長い絨毯が、床一杯に敷き詰められている。数少ない家具であるテーブルと椅子も、繊細な彫刻が施されたマホガニー製である。天井から下がるシャンデリアは、揺らめく赤橙色の光を四方八方に反射し、部屋全体を奇怪な陰影で隅々まで照らしている。

一番人目を引くのは、大人三人が並んで横になっても余裕がありそうな、大きなベッドであろう。見た目の高価さなら、他の家具にひけを取るまい。

ベッドの四方を囲む白いカーテンは締め切られ、奥から女の掠れた声が流れてくる。それが悲鳴なのか喘ぎなのか、知るのは当事者だけだ。

カーウィン・イムグリオイスト卿は、汗で額に貼り付いた彼女の前髪を、左手で払い除けた。

指が触れただけなのに、小さな声が彼女の口から漏れ出る。

二人の頭上、天井近くの高価な電灯からは、シャンデリアの光とは異なる安定した白い光が放たれ、互いを隠すことなく照らしていた。

カーウィンの年齢は、二十代半ばから三十代といったところか。

髭の生える気配のない張りのある肌は、確かに二十代前半の青年で通用しそうだ。

金髪碧眼、眉目秀麗の言葉が、実に似合う美男だ。

癖のある見事な金髪に、海のように澄んだ青い二重の瞳。鼻梁から口元にかけての線は彫りが深く、意志の強さを伺わせる。それに對し顎の線は滑らかで、ともすれば頑固とすら見える表情を和らげている。肌理の細かな色白の肌からは、陽光の元での肉体労働と無縁であると知れる。

十人中八、九人の年頃の娘ならば、ほんの数秒で陥落してしまい

そんな、掛け値無し的美形だ。実際その通りで、加えてカーウインの血筋と地位、収入を知れば、落ちない娘はいないと言って、過言ではない。

そんなカーウインの容姿端麗さなど、今の恋人達には無粋な形容だ。

カーウインは彼女の額から頬、そして顎先へと、指を走らせた。指の動きに敏感に反応し、彼女は再び声を漏らし、小刻みに身体を震わせる。

「綺麗だ……」

さりげない彼女の反応に、カーウインは眩しげに瞳を細め、小さく囁いた。

カーウインの声自体、緊張と興奮に上擦っている。それでも、聞いた者の脳髓を痺れさせ、思考力を奪い去ってしまいそうな甘い声音は、恋人との逢瀬に実に相応しい。

「……あつ……」

彼女が声を上げた。

カーウインの左手が、首筋を伝わり、さらに下へと向かったのだ。意識してではないだろう、長い栗毛色の髪が、小さくベッドの上で揺れる。両頬を流れ落ちる涙の跡が、枕に吸い込まれ消えていく。

さも愛しそうにカーウインは微笑み、右手で涙の跡を拭くと、彼女の額に軽く口付けした。

彼女は身震いすると、恋人の触れる場所以外の感覚を締め出そうとするかのように、硬く閉じたまぶたに力を入れた。カーウインの唇がまぶたの上から左頬、そして耳元へと静かに移動するに合わせ、長いまつげが切なげに、小刻みに揺れる。

身内に溜まった緊張を解きほぐすように、カーウインは大きく息を吐いた。

感に入った声を上げ、彼女の喉元が仰け反る。

カーウインは彼女から顔を離し、光に照らし出される彼女の全身を、今一度見つめた。

「綺麗だ……」

他に形容する言葉が思いつかない。

『人の真の美しさは、外見で決まるのではない。中身である』
誰かの言葉が、脳裏をよぎる。

正しくその通りだと、実感せずにいられない。

腹部から胸部にかけて切開し、身体の中身の隅々まで、一切合切を開示してくれる彼女を見れば、異議を唱える気持ちは無くなる。

カーウインがかつて交際したどの異性と較べても、眼前の彼女の美しさは遜色ない。女性の選り好みの激しいカーウインの基準からしても、間違いなくトップクラスである。

彼女の肺は、喫煙者に特有の肺胞が溶け、スポンジと化した柔らかな物ではない。張りがあり、硬い。近年の女性の喫煙に、心を痛めているカーウインとしては、実に喜ばしい限りだ。ニコチンの誘発する酵素で細胞が溶け、タールが糸引く肺など、腸内に溜まった排泄物よりも汚らしく、グロテスク極まりなく、直視に耐えられない。

肺の下に見え隠れする心臓は、激しい運動を強いられてこなかった平均的な大きさである。すでに確認してあるが、心音は規則正しく、妙な雑音は混じっていない。欠陥はない、という事だ。

五臓六腑の残り、肝臓、脾臓、腎臓に異常は見られず、胃、胆、大腸、小腸、膀胱、三焦といった消化器官も、健康そのものである。そうでなければ、カーウインの目に叶うはずもない。

胸筋と共に取り除かれた肋骨は、彼女の横に丁寧に並べられている。肋骨の下には、彼女の白い肌が、一緒に剥がされた肉と一緒に、シートの上に広がっている。

剥き出しにされた彼女の臓器に、カーウインは新たな興奮を覚えた。鎖骨下の切開面をなぞっていた左手を下げ、肺をさする。

肺表面を覆う、血液以外のぬめりに、指が滑る。このぬめりが、肺を外気に触れさせぬよう守り、自壊から防いでいるのだ。そうでもなければ、皮膚一枚分の厚さもない気泡の塊は、気圧の変化で連

鎖的に潰れていってしまふ。

もつとも、肺が無事だからと言って、呼吸が保証されている訳ではない。

呼吸を保つと言う事は、肺内の空気循環を保つ事である。その循環を保つには、胸筋を伸縮させ、体内圧を上下させなくてはならない。胸の膨張により、胸内体積が増え、体内圧が下がり、肺に空気が入る。胸が縮めば、体内圧が上がり、空気は体外に押し出される。これが呼吸の基本原理である。

ところがすでに、彼女の胸は切り開かれている。肋骨すら取り除かれ、自然な呼吸はもう出来ない状態だ。加えて、カーウインの好奇心で肺を縦に二つに切り割られては、呼吸がどうこう言える状態でなくなっている。強制的に気管に空気を送り込む方法もあるが、そこまでカーウインは頓着していない。

彼女の唇が小さく震え、最後の息を吐き出す、掠れた笛の音のような声が漏れた。

「……………殺し……………」

彼女の哀願に、カーウインは右手の人差し指を、彼女の唇に軽く当てた。

「そんなこと、言うものじゃありません」

興奮に掠れてはいても、カーウインの口調には愛しさと、限りない優しさが感じられる。

「自己保存本能というのは、どの生命にも共通して与えられた権利なんです。それを放棄しては、生命を放棄するのと同じでしょう？」

彼女の余命が幾ばくもないと、自覚していないかのような口調だ。そしておそらく、自覚してはいまい。

左手は肺と肺の隙間をまさぐり、未だ規則正しく活動している心臓を探り当てた。

「知っていますか？ 世間のあらかたは、心臓こそが一番重要な器官だと思っていますけれど、それが誤解だという事？」

彼女のわななく唇が否定だと判断し、カーウィンは説明を続けた。

「一説に、心臓というのは、腎臓に血液を送るだけのポンプではない、というのがあります。腎臓こそが一番重要な器官だと、言う訳です。どうしてでしょう？ それはですね、体内を一周し、不純物の混じった血液を腎臓は濾過ろかするからです。これがなかったら、体内の毒素、特にアンモニアですか、を廃棄できなくなるからですね。まあ、濾過するのはそれだけじゃありませんけど」

塩分と水分を取り除くのも、腎臓の役割である。アンモニアから尿酸、更に尿素へと無毒化していくのも腎臓の機能だったような記憶があるが、今一つ定かでない。勉強不足を痛感させられる。

小刻みに震える彼女の赤い唇に魅せられ、カーウィンは吸い込まれるように、彼女と唇を合わせていた。彼女の靄もやのかかった瞳が晴れ、喉元が微かに上下する。

唇を離し、彼女の左手を取ると、指先に軽いキスをする。

まだ指先に感覚が残っているのか、彼女は小さな声を上げた。指が痙攣し、震える。

彼女の反応に、カーウィンは感動と満足の笑みを浮かべた。害意も罪悪感もない、子供のような無邪気な微笑みだ。

「まあ、誤解を受ける理由は、納得のいくものですけどね」
彼女の左手を自身の頬に押し当て、柔らかな感触に感慨無量に目を閉じる。尾てい骨から頭の先まで、痺れるような興奮が走り抜け、武者震いに襲われながら、説明を再開する。

「心臓を除く多くの内臓に、左右二つあるのが誤解の原因です。片方が駄目でも予備があるからと、そう思われても仕方ないのかもしれない。でもその理屈で言うなら、余計な内臓はとうに退化しているも良いはずじゃないですか。実際、そうなっている内臓器が幾つかあるのですから。それでも一対で機能しているのですから、予備があるから、みたいな説はその事実無根なのですよ」

カーウィンは顔を曇らせ、力無く頭を左右に振った。生理学は専門でなく、また彼女に解り易く説明するつもりなら、一晩の逢瀬で

果たせる内容でもない。

彼女の発した小さな声に、カーウィンは元の表情を取り戻した。

「おっと、失礼。僕としたことが、女性に暗い顔を見せてしまうとは」

カーウィンは会釈し、手にしたままの彼女の指に、もう一度口付けした。

「でも見方によつては、心臓は一つで二つ分の働きをしている訳です。そう……例えば……鼓動、と言えば、理解しやすいでしょうか？」

心臓に血液を流し込み、別の血管に送り出す行為は、一度の伸縮運動で出来るものではない。まず上半分が萎縮し、一定の間隔を置き、下半分が収縮する。下半分の緊張が解け、リラックス状態に戻る事で、心臓一回分の活動が終了する。

健康な心臓は、一回の運動で二度音を立てる。膨らんで一回、縮んで一回、との誤解を良く受けるが、心臓は所詮筋肉の塊である。筋肉が伸縮の度に音を立てるのであれば、筋肉を持つ全ての動物は全身から音を立てなくてはならなくなる。実際そうでないのは、かけら程の観察力を持てば、大抵のヒト属が同意する内容である。

もう少し観察力のあるヒト属なら、心臓が音を立てる原因を、左右心房心室の合計四つある空間を隔てる、弁の開閉にあると予想するだろう。

そしてさらにもう少し、その方面の研究に携わるか、知識を得たヒト属なら、鼓動の原因は弁とは無関係である、と知っている。

最初の鼓動は、心臓に流れ込む血液が、血管を震わせるために起きる振動である。二度目の鼓動は、心臓から送り出された血液の半分近くが、心臓に逆流する時の振動だと、予想されている。

大抵の自称『識者』は、心臓は百パーセントの完全性で血液循環を行っている、異口同音に唱えるが、実際の循環率は良くて五十パーセント程度のものだ。血液が心臓に逆流するなど、それこそ世の理に反抗する非常識と決めつけ、想像した事すらあるまい。

同様に、一回の鼓動で全身の半分近い血液を循環できると思い込んでいいるなら、それも大きな間違いだ。一鼓動で移送できる血液量など、二百ミリリットルにも満たない。

全身の血液が一箇所に集中する重要な器官だと、無知蒙昧ぶりを披露するつもりなら、大動脈・大静脈が通う他の器官では、血液が集中しないのかと聞き返してみたい。

「……勿論、心臓の活動一つ取っても、全てが明かされている訳ではありません。例えば、極度の運動を専門にする中には、三つ目の鼓動を持つヒト属もいます。これがどこから来るものなのか、僕の知人の専門家でも、仮説しかできてないそうです。それとか、心臓がどうして正確な時間差で活動できるのか、それも判っていません」

後者の問題の解答の一部なりは、カーウィン程度の知識量でも知っている。心臓のほぼ中央の筋肉は、ほとんど伸縮を行わない壁となっている。この壁が、収縮の合図を下半分に届ける妨害をしているのだ。そのため、合図となる振動は、上半分では時間差なしに受信されるのだが、下半分に届けるには壁を迂回しなくてはならない。この両者の時間差が、上半分と下半分の不協和になっているのだ。

明確にされていないのは、上下の収縮の合図となる源の正体である。心臓のどこかに発信源があるのは確かだ。しかしそれがどのようなもので、どのようなメカニズムで定期的な信号を発せるのか、カーウィンの聞き齧りの知識では、彼女を満足させる説明はできない。

「でも、先程の知人の話ですと、基本的な電気化学と流体力学の理論で、説明はできるそうです。その証明となる部分が、まだ見つかっていないだけだとか。少し話が反れてしまいますけど、聞きたいですか？」

彼女は返事をしなかった。

カーウィンはいぶかしみ、眉根を寄せた。会話に興味を示さないとは、彼女らしい態度ではない。

顔を近づけ、彼女の瞳を覗き込む。

瞳孔が開ききっていた。元の緑色の部分は輪郭しか残っておらず、底の見えない黒い闇が、瞳の大部分を占めている。

息をしていないのは、別に不思議でもない。胸を切開した時点で、自力による呼吸機能は失われている。

首筋に手を当て、脈が止まっていると確認し、ようやく納得する。考えてみれば、左手に感じていた心臓の鼓動が、しばらく前から途絶えている。

心臓停止を医学的な『死』とするなら、彼女は疑いなく死亡していた。脳が生きているとしても、残りほんの数分のことだろう。

カーウインはそっと、彼女の心臓から左手を離れた。後悔にも似た想いに胸が締め付けられ、胸に空いた風穴に、虚無感が吹き込んでくる。

「……何です……もう終わりですか……？」

かろうじて絞り出した声は、つい今し方までの生気に溢れた声ではなくなっていた。冷たく、風が空洞を吹き抜けるような虚ろさだ。崩れてしまいそうな疲労感を覚えつつ、喪失に伴う精神の第一段階『無感動の段階』にあるのだと、冷めた部分で納得する。

彼女と話したい題材は、まだまだ沢山あったのだ。彼女は会話に時間を費やすより、簡単な死を選んだのだ。そのようにすら思えてしまう程、呆気ない幕切れだ。

カーウインの脳裏を、生前の彼女の姿が駆け抜けていった。彼女との出会い、彼女の笑顔、彼女の唇の柔らかさ、彼女の肌の温もり……。全ての美しい思い出は、今や物言わぬ肉片と化してしまった。何となしに、彼女に裏切られたような別の虚しさが、カーウインの胸に去来した。

後に残されるヒト属の精神的苦痛を考慮せず、容易く生命を投げ捨ててしまった彼女の行動は、余りにも彼女らしくない。ありもしない『死後の安息』の幻影にしがみつき、肉体を少々苛まれたからと、生きる気力をさっさと投げ出してしまったように見受けられる。

彼女が何を信じようと、それを問い正す訳にはいかない。自分の思想こそが唯一無二と信じ、それに従わない相手を力づくで翻意させるのは、カーウインの主義でもない。

しかし彼女とは、本当に、もう少し長い交際を続けたかった。

そんな後悔だけが、心臓をえぐり取られるような痛みとなつて残る。まだしばらく交際してから、切り刻んでも良かったのではないか、との後悔と、想いの全てを語り合う機会を持つともせず、死を選んだ彼女への不満に、胸中の虚無感が膨らんでいく。

愛する女性との別れは、いつになつても辛く苦しい。

第二段階、『思慕と探索の段階』が、終わりに近づいてきた。思慕に悩み、悲嘆に暮れる、本来であれば最も長い期間続く状態だ。

どれだけ後悔しようと、怒りに駆られようと、悲嘆に暮れようと、死者は戻つてはこない。死者は死者、それ以上でも、それ以下でもない。

第三段階、『混乱と絶望の段階』に特有の反応だ。

「……貴女の事……深く心に留めておきますから……」

彼女の遺体を前に、カーウインは決して絶やさなかつた笑みを浮かべたまま、彼女と最後の口付けを交わした。

実際は十分も経っていないだろう、カーウインにしては充分な追悼を行うと、顔を拭い、深い溜め息を一度だけ漏らした。

「ま、済んでしまった事は仕方ありません」

さすががしさすら感じさせる口調には、つい今し方までの愛別離苦の苦悩や、殺人を犯した罪悪感は見受けられない。

そして、『悲哀の過程』もしくは『喪の作業』で知られる最終段階、『再建の段階』に到つたに相応しい言葉を投げかける。

「あなたとの思い出は、僕の大事な宝物です」

ありがちな『安らかにお休み下さい』の言葉を、カーウインは口

にできなかった。生体活動を停止した肉片に言っても意味はないし、『魂』などの世迷言も信じていない。死んでしまえば、全てはそこで停止する。肉は土に還り、知識や記憶は永遠に失われる。運が良ければ、肉の一部の分子が別の生物の中に取り込まれる事もあるうが、所詮はそれだけの事、取り立てるべき謂れすらない。

こんな単純な理屈を、なぜヒト属が素直に受け入れようとせず、『死後の世界』のような荒唐無稽な作り話にしがみつきたがるのか、カーウインには理解できない。

おそらく、ヒト属には『知性』と呼べるだけの知性が、備わっていないからなのだろう。

更なる観察、研究、調査を必要とする領域である。

カーウインは彼女の残骸にもう一度目を向けてから、枕元のロープを引いた。どこかで呼び鈴が鳴っているはずだが、外の音は一切聞こえてこない。

程なくしてドアが開いた。

「御用でしょうか？」

恭しく頭を下げたのは、長年イムグリオイスト家に務めてきた執事だった。カーウインの行為のみならず、イムグリオイスト家に関わるスキヤングルの数々を、殺されても漏らさないと信頼できるヒト属の一体だ。

「彼女を屋敷に案内したい。手配してくれ」

「かしこまりました」

鷹揚なカーウインの指示に、執事はベッドを一瞥し、顔色一つ変えずに再度頭を下げた。

「それで卿は？ 別の車を仕立てましようか？」

貴族の地位が失墜したこの時勢にあっても、名家のスキヤングルを狙う輩は未だ後を絶たない。女性関係に自由でいられる独身であっても、交際相手がいるとなれば、報道関係が黙ってはいない。相手の生死に関わらず、主人のスキヤングルにつながる気遣いを遣うのも、一流の執事の役割だ。

カーウインは窓の外を見遣り、頭を左右に振った。

「いや、今夜はいらない。たまには散歩しながら帰ろう」

今夜の彼女との甘い逢瀬の記憶は、無粋な雑音を背景に反芻したくない。静かな中、一人で心の声に耳を傾け、思い返すべき美しい記憶だ。

「かしこまりました」

執事は会釈すると、ハンガーにかけてあったコートを外した。

第二話 異端審問

街は濃霧に覆われていた。

別に珍しい出来事ではない。一年中、夜間の大半が濃霧に包まれるために、『霧の都』の名の別名で呼ばれている。

外の寒気に、カーウインは一度身震いすると、コートの襟を合わせた。

純白の手袋を引き締め、シルクハットの位置を正し、ステッキを右手に、背筋も正しく夜道へと歩き出す。

ブーツの踵が、路上に敷き詰められた石畳を蹴り、乾いた音を人気の途絶えた路上に響かせる。

舗装の整った街中とて、ブーツは外出の基本である。少しでも横道に入れば、踏み固められただけの土になるし、雨の降った後などは、くるぶしより深いぬかるみになってしまう。

例え晴れた日でも、夜間の路上は濡れているのが常だ。浮浪者を道端に住み着かせないため、通り沿いの店は、閉店前に水を撒くからだ。

街灯が立ち並ぶ大通りにも人気が見えないのは、霧のせいばかりでもない。撒かれた水に、浮浪者は全員大通りから姿を消すし、単体を狙う強盗の犯罪件数も、年を追う毎に増加している。

濃霧に包まれた歩道を、カーウインは歩き続けた。

歩き続ける毎に、彼女との逢瀬で感じた雲の上を歩く感動は冷め、皮肉な世界観と同属への嫌悪に取って代わる。

ホモ・サピエンスと言う動物の個体数が、余りにも多すぎる。個体数の密度が増せば、社会的な生物であっても、お互い攻撃的になるものだ。そして、特定の個体密度を越えてしまうと、どれだけ充分な食料があろうとも、共食いに走るのが自然界の法則だ。しかし生憎と、ヒト属の密度は、まだそこまで高くない。

だが、すでに臨界近くに達しているのは間違いない。近年の犯罪

率の上昇は、その仮説を如実に示しているし、自身の抱く憎悪は、疑いなく同属のみに向けられている。

カーウインを激昂させるのは、ほぼ全ての自称『良識ある知識人や『常識人』』とやらが、現実に目を背けるべく、全力を尽くしている事だ。犯罪の原因は貧富の差と、金銭への欲望にあるとすり替え、ヒト属は他の動物より賢いと、傲慢な幻覚を信じて疑わない。度重なる動物実験の比較結果にも関わらずに、だ。

最悪なのは、感情に任せ、手当たり次第に殺戮を行ったところで、状況は好転しないと、知ってしまった事だ。法・道徳・倫理以前の問題に気づいてしまったし、見境のない個体数調整は、女性一人一人を時間をかけて切り刻む楽しみを奪う、自身の信条に反する没個性的な行動でもある。

自らの思考に没頭していたカーウインは、濃霧の反対側から聞こえてくる靴音に、現実に戻された。

ほんの一瞬濃霧がゆらめき、霧が晴れたようだった。

濃霧と暗闇が晴れた先の横道から、転がるように一つの影が躍り出た。色褪せた茶色のコートに、頭からずり落ちそうになる帽子を右手で押さえている。体格とズボンからして、一体のオスだ。少しでも身だしなみを心得る女性であれば、ズボンのような無粋な衣類は身に付けたりしない。

カーウインの靴音を聞きつけたらしいオスは、飛び上がるような動作で振り向いた。いかにも平民的な服装をしたオスだが、明らかに恐怖が、態度から滲み出ている。飛び出してきた脇道を一瞥すると、カーウインに背を向けて走り出し、濃霧の中に見えなくなる。

オスをそこまで恐怖に駆り立てる原因は、すぐに脇道から姿を現した。

一人の女性と、二体のオスだ。足首まで隠れるドレスの裾と風になびく長髪を、見誤ったりしない。

女性は見ると手ぶらでも、オス共の手には、ボウガンが握られていた。拳銃が発明されて以来、競技用程度の価値しかなくなっ

た武器だ。それを剥き出しにして持ち運ぶだけでもおかしいのに、つがえているのは矢ではなく、太い木の杭である。

一人と二体の追っているのが、先程のオスである事は疑いようない。

だが、ただの強盗ではなからう。ボウガンに木の杭をつがえるなど、目的は数える程度しかない。

同時に、追っ手の正体にも見当がつく。

「『^{インクイジション} 異端審問』……ですか」

カーウィンは鼻で笑った。連中は、自分達が何を追っているのか、知っているつもりなのだろう。それがいかに誤りかは、すぐに知ることになるが。それとも、知らぬままに終わるのか。いずれにせよ、結果に変わりようはない。

一人と二体は、カーウィンの漏らした小声に、気が付かなかったようだ。通りに出た直後に左右へ目を向け、獲物の逃げていった方向へ駆けていく。

幸か不幸か、カーウィンの進む方向でもある。

カーウィンは速度を変えず、連中の駆けていった方角へと歩き続けた。

悲鳴が聞こえてきたのは、二十メートルと歩かないうちだ。追い詰められた獲物が、助けを求める絶叫である。

誰も助けに現れないだろうとは、獲物も狩り人も、カーウィンも知っている。『知性ある生物』は、理由も無く危険かもしれない物事に首を突っ込む愚かさを知っている。

この手の自己保存本能を、『理性』とやらを持ち合わせる『常識人』に言わせれば、知性的な行動らしい。他の動物と異なり、『危険かもしれない』と思考し、行動するからだそうだ。

とんでもない笑い話だ。それが理性の正体だとするなら、理性とは『理屈付けした本能』ではないか。そんなものを、『常識人』は後生大事に抱いている訳だ。

獲物が悲鳴を上げた場所まで、残された距離はわずかだった。霧

の向こうに蠢く三つの姿を認め、右手の建物の壁に背中を押し付ける。

二体のオスが、動かなくなった獲物の両腕を掴み、引きずっているとこらだった。獲物の胸から、一本の杭が生えている。

オス達は一言も言葉を交わさない。まるで何度も同じ事を繰り返してきたような、息の合った動作で、獲物の身体を路地裏へ引きずりこむ。

二体と連れ立っていた女性は、路地裏で待ち構えていた。二体を手を放すと、獲物に何やら液体を振り撒く。

油だろつと、カーウィンは見当を付けた。

心臓に木の杭を打ち込み、骨まで焼き払う。吸血鬼を滅ぼす常套手段である。日光に晒すのも効果的であるが、夜間にそれを期待できるとはならない。

カーウィンが物陰で見守る前で、オスの一体がマッチをこすり、火を灯した。赤橙色の小さな光を受け、オスの顔が暗闇に浮かび上がる。

オスは勝利に酔った凄惨な笑みを浮かべると、マッチを獲物の上に落とした。

途端、獲物は盛大に燃え上がる。カーウィンの推理した通り、女性の振りかけた液体は、可燃性の強い油だったらしい。

一般的な吸血鬼であれば、話はこれで終わりだ。

問題なのは、獲物が実は、連中が予想したような吸血鬼ではない事だ。そもそも、『吸血鬼』なるものは存在しない。『魔導師』や『ライカンスローブ』のような、『異端審問』で迫害されるべき存在も、未だ確認されていない。

言い換えれば、何の変哲もないホモ・サピエンスの一部を任意に選出し、言いがかりにも等しい罪状を付きつけ、法的権利も持たない身でありながら、検事・裁判官・判審員・処刑人を気取った『犯罪』だ。

連中が行ったのは、『異端狩り』を称した殺人でしかない。真偽

はいずれにせよ、有効とされる確認すら行わず、処刑したに違いな
い。大方、『心臓に杭を打ち込んだら死んだから、『異端』である』
が有罪とした言い分であろう。

指摘するまでもなく、確認を取る手間をかけようと思慮する能力
が欠落しているのは、『異端審問』の時代から一向に変わっていない。
連中にとり、これは『人類の敵』を撲滅する『聖戦』であり、
戦争には常に被害者がつきまとうと、答えを探さない行為をすでに
正当化している。

『異端審問』^{インクイジション}が違法とされ、とうに一世紀を超えている。それにも
関わらず、聖戦気分で殺戮を続けるヒト属は、未だ後を絶たない。
理由は簡単だ。

現在のヒト属は共通して、内心では誰彼構わず殺戮して回りたい
のだ。総個体数が多すぎるため起きる共食い現象が、とうに始まっ
ている証明の一端である。本能から来る欲求だと認めては、知性体
の誇りを傷つけてしまうがために、『正義』だの『主の教え』だの
を振りかざし、本能的な殺戮衝動を飾っているに過ぎない。

同属の行動を物陰から見遣り、カーウインは音を出さずに微笑ん
だ。いかに自分の推論が正しいか、目の前に証明があると知るのは、
いつでも満ち足りた気分にしてくれる。

獲物の身体から立ち上る黒煙が広がり、肉の焼ける香ばしい香り
が、辺りを漂い始める。

死骸をどうするつもりなのか、カーウインは不思議に思った。油
で燃やせるのは、せいぜい表皮程度である。かろうじて第二度第三
度の火傷に至らせるとしても、死体を燃やすには火力と時間が必要
だ。骨になるまで燃やすつもりなら、当然長い時間がかかるし、骨
まで燃やすつもりなら、それこそ専用の焼却炉を建造しなくてはな
らない。

まさか燃やしきれなかったからと、食用にするつもりではなから
う。『異端審問』^{インクイジション}では、倫理にもとる悪魔の行為と、厳しく取り締
まっていたはずだ。現代の『異端審問』^{インクイジション}が、異なる倫理と正義を振

り回しているとは、とても考えられない。

だが、食人の風習を持つ文明の話は、興味の傍ら何度か聞いている。ほんの数年前の話では、新大陸に渡った移民の一部が、途中冬山で遭難しかけ、連れていた家畜や犬すらも食べ尽くし、しまいは動けなくなつた同属すら食料にして生き延びたそうだ。それらの倫理観は、当初こちらと同じだったはずだ。

カーウィンとて、『良識人』の言う『倫理観』が邪魔をし、食人は経験していない。子供向けの童話ですら、人肉からシチューの出汁を取る調理法を記載しているのだから、正しい書物を見つければ難しくないが。

彼女との逢い引きに、最後の食事が満足に喉を通らなかつたと思出し、カーウィンは空腹を感じた。レアでも食べられるのか疑問を抱きつつ、『異端審問^{インクイジション}』の動向を探る。

炎は早くも、勢いを急速に失つていくところだった。獲物の上げた悲鳴にも反応しなかつた周辺のヒト属が、今更肉の焼ける匂いに釣られ、邪魔をしに現れる手間をかけるはずもない。衰えていく赤橙色の光を鈍く反射する濃霧が、音すらも吸収してしまったかのようになり、実に静かなものだ。

女性の低い呟きが、かろつじて聞こえてくる。詳細を聞き取れる程の音量ではないが、内容は予測できないでもない。大方、悪魔に魅入られたオスの魂が、『聖なる』炎に浄化され、天界に召されるよう祈りを捧げているのだろう。

同属だと知らずに殺害した満足感に浸る、女性と二体の軽拳妄動さを内心嘲笑しつつ、顔を覚えようと、壁から顔を覗かせる。『異端審問』と関わり合いたくなければ、注意を向けられる前に、見えない場所へ隠れてしまふに限る。そのためには、まず相手の顔を見分けておくのが必須である。

火を付けたオスの顔が、真つ先に目に入った。消えかかる炎に照らされ、映し出された顔の造形は、揺らめく光とカーウィンの先入観も合い重なり、濡れたガーゴイルの像を思わせた。自己満足に浸

りきつた笑みに唇を歪め、炎を反射した瞳は、赤く輝いている。熱のためか汗に濡れた肌は、赤橙色の皮膚をした人三化七の爬虫類の皮膚を連想させる。

死骸を挟んでオスの反対側に、女性が立っていた。

彼女の横顔を改めて見直した瞬間、カーウインの鼓動は跳ね上がった。胸が締め付けられ、息がつけなくなる。

「……ジェシカ・アンダーソン……」

自分の耳にも届くかどうかの小声で漏らしたのは、かつて交際していた女性の名だ。

歳は二十代になるかならないかだろうか。踵の高いブーツを履いているため、頭の赤さは最初のオスと同じ高さにある。それでなくとも、女性として少々背丈は高い方かもしれない。ドレスの上から黒いケープを羽織っているのが、背丈以外の正確な体格は測りにくく、ケープの上からでも解るのは、彼女が至って健康な肉体を有している事だけだ。

顔立ちは、美人と言う訳ではないが、彼女なりの魅力は感じさせる。綾羅錦繡りょうらきんしゅうで飾られた上流階級の婦人方と違い、束ねた髪を頭の上で結わえ上げたりせず、腰まで垂らした軽く波打つ髪は、炎を反射して赤く輝く。しかるべき化粧を施し、出るべき場所に出れば、オス共の注意を惹きつけるのに充分であろう。

空空寂々とした無機質な表情で、下火になりゆく炎を見つめる固く引き締めた口元に、わずかながら良心の呵責を滲ませている。孤影こえい悄然の儂さを感じさせるのは、揺れる炎のためなのか。

同一人物であるはずがないと知っても、彼女の容貌はかつての恋人に良く似ていた。

それ故に、逢い引きの相手に失礼だと解っていても、カーウインは目の前の女性に、一目惚れにも似た深い感動を抱かずにはいられなかった。

息が詰まり、頭に血が登る。彼女を知り、彼女の心を勝ち得たい要求が、ふつふつと心に沸き上がる。先程の逢瀬の興奮と充足感を

色褪せさせてしまう新たな恋の予感に、全身が火照り出す。

彼女が『異端審問^{インクイジション}』である事も、連中から遠ざかるうとする気持ちも、最早脳裏には残っていなかった。彼女を知りたい欲求の前には、自らの生命の危険と、取り巻き二体の障害など、存在しないに等しい。

最後のオスは、死骸を囲んで最初のオスと女性との間に立っている。位置的に背中をカーウインに向けている状態なので、顔は判らない。

しかしさして重要ではない。顔は判らなくとも、どのような存在なのか、服装から推し量れる。平民出身の間に流行している服装だ。炎はもうじき鎮火する。

それを見越してか、背中を見せるオスが、コートの下から大きな袋を取り出した。

どこかに埋葬するか、残りを燃やすつもりなのだろう。獲物の罪状が吸血鬼であるからには、後者の可能性が断然高い。

燃え残った獲物を袋に詰め、濃霧の中を動き出した『異端審問』の後を、カーウインは追跡した。

第三話 訪問者

『霧の都』の二つ名でも知られるこの都市の郊外に、『貴族街』と呼ばれる住宅地がある。市民革命により、貴族の価値が法的には肩書きだけになった昨今でも、先祖代々よりの財産を未だに食い潰している一族は少なくない。そうでなくとも、貴族というのは子供の教育に熱心なものだ。倫理面での教育はともかく、学歴が高いだけでも、平民出身よりは一步も二歩も抜き出ている。

イムグリオイスト家の屋敷は、そんな『貴族街』でも、最も古いとされる区画にある。革命後、城と領土は没収されたと言え、家系を辿れば十字軍遠征時代まで遡るのだ。革命に巻き込まれようとも、母国が滅亡寸前にあるうとも、近隣周辺の国々で『異端審問^{インクイジション}』の理不尽な殺戮が行われようとも、国の栄華盛衰に関わりなく生き延びる術を心得ているし、多少の富を世代毎に蓄えてもいる。

広大な庭の一画に、少々裕福な平民一家屋が収まりそうな温室を建てられたのも、そういった経済的背景があったからこそだ。そしてその温室は、カーウインの趣味と研究の砦でもある。

侍女が来客の訪問を告げ温室に案内してきたのは、とうに夜も更け、満天に星空が輝く時間になってからだった。

訪れたのは、一体のオスだった。歳の頃は三十代の終わりか四十年代、朝には剃ってあったのだろうが、時間的に無精髭が顎の輪郭を覆っている。たるんだ目を隠すようにずり落ちた帽子に、薄汚れくたびれたコートという弊衣破帽な成りは、貴族の屋敷に足を踏み入れるべき服装ではない。

「カーウイン・イムグリオイスト……卿……？」

温室に他に誰もいないと確認し、オスは帽子を左手で脱ぐと胸に当てた。半ば以上禿げ上がった薄い髪が、汗かコロンか霧で頭蓋に貼り付いている。右手でコートの内ポケットを探り、金色に輝く貧相なバッジを取り出す。

「市警のダールトン警部です。……イムグリオイスト卿ですね？」
警部と名乗ったオスが、怪訝な表情をする訳は、判らなくもない。
カーウィン外見上は、ともすれば保護者を必要とする未成年者か、
ようやく成人したばかりの青年に見える。

「ええ。僕が当家の主、カーウィンです」

カーウィンは軽い笑みを浮かべ、右手を差し出しかけ、両手が泥だらけなのを見、握手をせず手を下げた。

「失礼。手が汚れているもので。ところで、用件とは？」

「昨日、殺人事件を目撃されたと、市警本部に來られましたね」
カーウィンの笑顔に、オスは心持ち強張っていた肩の力を抜いた。
貴族には貴族専門の警察組織が存在し、平民相手の市警察の関与を
徹底的に嫌う傾向にある。刑事・警部一人の首を跳ねてしまう位、
どこの貴族でも未だに持つ影響力だ。

「ええ。で、事件は解決したのですか？」

カーウィンは認め、その傍ら、足元に置いたバラの苗木を抱き上げた。
棘以外の茎は漆黒で、葉脈だけが血のように赤い。

「いえ、それが……」

口ごもるオスの反応は、あらかじめ予想していたものだった。

『インクインジョン 異端審問』が死骸の廃棄に結構な手間をかけているのは、カー
ウィンが直に観察している。運んだ先で盛大な炎を数時間に渡り焚
き続け、消し炭を骨ごと粉々に砕いて粉にした後、三つの壺に分け
入れている。壺の一つを焚き火近くの地面に埋め、一つの中身を川
に流している。最後の一つの行方は知らないが、大方山にでも持つ
ていき、頂上から撒き散らすつもりだろう。

火で灼き、地に埋め、水に撒き、風に飛ばす。周期表があるのに
四大元素を奉じ、吸血鬼を二度と復活させないため、最近の『異端
審問』が好んで用いる手段である。しかし考えるまでもなく、『四
大元素』は『異端』の奉じるものであるのだから、『異端審問』が
何をもって『異端』としているのか、疑わしい事この上ない。それ
でも『インクインジョン 異端審問』が合法であった一世紀前には、この手法すら『異

端』視され、使われずにいる。

「死体がなければ、事件は存在しない……ですか……」

オスを見向きもせず漏らし、手は抱えた苗木をテーブルの上の鉢に入れる。

死骸がなければ、殺人事件とはならない。

同じ事は、カーウインの交際相手にも言える。交際していたと見られる女性で、行方不明になる数は、年間十人近い。向けられた疑惑は数知れず、それでいて決め手となる証拠は一つもない。遺体も一人として発見されず、疑惑だけで有罪と決定できぬ法構造が、この場合随分役に立ってくれている。

「まあ、そんなところです」

オスは素直に認めた。

「ですが、卿の指摘された場所に、血痕が発見されています。殺人事件として捜査を開始する分には、あまり問題ないかと」

司法権力の目を逃れる手段は、大きく分けて二つ考えられる。一つは、法の目を逃れ、古木寒巖に隠れ暮らす事。二つ目は、法の目の前に度々姿を現し、協力的であると装い、容疑の目を反らすか、だ。

カーウインの選んだ手段は、言うまでもなく後者である。貴族階級では、そうそう人目を忍んで隠られるはずないし、『味方は近くに、敵はより近くに』の哲学は、カーウインの嗜好にも合う。

「でも、何です？」

オスが言い淀んでいると察し、カーウインは先を促した。自身の周辺に付きまとう行方不明者の多さが、今回の事件と関連付けされては困る。

「……容疑者についてです」

重い口から放たれた言葉は、カーウインが心配した内容ではなかった。

「身元が判ったと？」

司法権力に協力すべき、もう一つの理由である。個人や興信所を

用いるより、遙かに速やかな人身調査を無料で行ってくれる。勿論程度に限界はあるが、付き合い方によっては、内情まで話してくれる。

オスは重々しく頷いた。どことなく虚ろな瞳のため、威厳は欠片もないが。

「……余り……よろしい連中じゃあ、ありませんね」

「と言つと？」

オスはコートの中に右手を突っ込み、茶封筒を一通取り出した。封を開け、中から一枚の紙切れを出し、カーウィンに見せる。

昨晚警察署を訪れた際、証言と共に描かれた似顔絵だった。カーウインの見かけた女性とオスのうち、オスの方の絵である。

「彼の身元は、すぐに判明しました。クリストファー・オプライン。下っ端とは言え、間違いなく『インクイジション 異端審問』の一員です」

警部が浮かぬ顔をする理由は、その一言で明らかだった。

かつては法と正義の名の元、同属の支持と尊敬を一身に受けていた『インクイジション 異端審問』も、自然科学の唱える『因果論』の普及と、『神の摂理・悪魔の妨害』といった『神的一元論的世界観』の衰退に伴い、権力の座から追放されている。現在ではこの都市を支配する有力犯罪組織の一つにまで落ちぶれ、昔日の栄光を取り戻そうと、手段を問わず躍起に暗躍しているのが実情だ。

孤城落日の拳げ句、犯罪組織に身をやつした組織相手に、貴族を巻き込む可能性に抵抗があるのか、巻き込んで万が一被害でも与え、責任を問われ首が飛ぶのを心配しているのか、警部の本心は解らない。

「それで？ この件については、忘れてしまうように。そう言いたい訳ですか？」

何しろ遺体の発見のしようがないのだ。殺人事件として捜査を始めるよりも、行方不明扱にする方が、問題は少なくて済む。まして唯一の目撃者が貴族の当主で、参考人が『インクイジション 異端審問』の一員では、捜査がすぐに行き詰まるのは目に見えている。貴族会、市警、異端

審問の三方の腹が痛まないようにするには、事件は隠蔽し、事なかれ主義で解決するのが最善であろう。

オスは苦々しげに、少ない髪を掻きむしった。

「まあ、部長はそう言っているんですけどね……」

納得していないのは、口振りでも明白だった。以前にも、似たような件で何度も煮え湯を飲まされたらしい。

他にも付け足したらしいオスを待つ傍ら、カーウィンは棚から白塗りの壺を取り出した。壺の腹には、鉢に入れた苗木、同じ属のバラの絵が描かれている。

留め金を外し、蓋を開ける。

中身は黒灰色の灰だ。昨夜から朝方までかけ、念入りに焚いて作った貴重な代物だ。それが何の灰なのか、正体を知るのはカーウィンだけだ。

「僕にどうしろと？」

一向に話を始めないオスに、カーウィンは振り向かず尋ねた。壺を傾け、中身の黒灰色の灰を、親指の一関節が埋まる程度に入れる。

「忘れて下さいと言えば、二度と口にしないと、約束できますか？」

カーウィンは蓋の金具を固定してから、刑事に向き直った。

「それは……難しいですね……」

カーウィンの一生をかけた目的を一日でも早く達成するには、『インクイジション 異端審問』の存在は邪魔だ。

ヒト属の多くは信じたがらないが、現時点における無差別大量虐殺というのは、結果的に属種としての寿命を、引き延ばしてしまう行為なのだ。

片手間の知識しか持たぬヒト属は、総人口の激減が属種の滅亡に繋がると誤解しているが、そうでないのは、歴史が証明している。

マラリア、チフス、ペスト、コレラ、その他の高死亡率を誇る伝染病が蔓延しても、ヒト属は絶滅しなかった。伝染病でヒト属を一

掃するのは、歴史的事実からだけでなく、理論上不可能である。感染しにくい、発病率が低い、病気に対し平均より高い抵抗がある。理由はどうであれ、一部のヒト属は確実に生き残ってしまう。生き残った個体は、すぐさま繁殖を開始し、じきに元の個体数に戻ってしまう。しかもその時には、同じ病気での死亡率が著しく低下した集団となつて、だ。

同じ効果の例としては、殺虫剤を用いての害虫の駆除が上げられる。かけられた薬品に多少の抵抗力があるのか、多からず少なからず生き残る個体がある。当然、次世代の個体は親の特質を受け継ぎ、同様の抵抗力を持って産まれてくる。中には持たずに現れる個体もいるだろうが、そういった個体は、次の散布で淘汰されてしまう。再び生き残った個体だけが繁殖し、より抵抗力のある世代を創り出す権利を持つのだ。世代の新陳代謝が激しく、一度の産卵で大量の子孫を創り出す昆虫目ゆえ、殺虫剤がほんの数年で効果を維持できなくなる理由である。

これが『生命の三定義』にある『適応力』だ。この場合の薬品散布とは、生き延びるべき個体と、死ぬべき個体とを選別する環境の一部である。湿原から砂漠へと突然環境を変え、生き延びる術を身に付ける事だけを、適応力と呼ぶのではない。

カーウィンの見る限り、ヒト属に何らかの災害を与え、個体数を激減させるのは、絶滅どころか貢献する行為でしかない。海洋と植生限界域以外の全環境に適応可能な昆虫目程ではないにせよ、ヒト属の適応力も侮りがたい。確実な絶滅に導くには、個体数を個体許容限界数を越えるまで、生殖・増殖させるしかない。限界値を越えてしまえば、生物学の法則に従い、ものの一世紀前後で、地上からヒト属は消え失せるはず。

そのためには、現在のヒト属が奉る『(ヒト属だけが)生きる権利』とやらを尊重し、出産率を上げ、死亡率を下げるよう協力するしかない。不道徳な犯罪組織に存在されて困るのは、そのためだ。

想像するだけで、無差別な殺戮衝動に駆られる計画だ。許容限界

に達するには、大規模な殺戮が行われたいとして、まだ二、三世紀が必要であろう。共食い現象が要求する本能を時折解放せねば、いつか見境を無くし、殺戮に走ってしまいそんな時間である。

「……その件について口外しないと誓約したとして、仮にも目撃者の僕を、放っておいてくれる保証、ありますか？」

オスは力無く、頭を左右に振った。

噂に聞く『異端審問^{インクイジション}』の実情が正しければ、見逃してもらえない確率は、五分五分と言ったところか。警察関係に通告されるのは困るが、目撃者がいなくては宣伝にならない、ということころらしい。

「では、僕にどうしろと言いたいです？」

目的を迅速に叶える過程において、『異端審問^{インクイジション}』のような存在に消えてもらいたいのは山々だ。生命を狙われる危険も迷惑な話だ。しかし個人の力で消すには、少々大きすぎる。

「言っておきますけど、僕には僕なりに、この街に責任があるのですからね」

イムグリオイスト家では、浮浪者や孤児の収容施設、医薬品や医療関連施設等へ、多額の寄付を毎年行っている。貴族間では家名を出すのは不潔とされているため、無名で行っているが、家の出納帳簿と照らし合わせ記録を追跡すれば、イムグリオイスト家の年間支出額は警察でなくても簡単に判る。

無論これも、ヒト属の増殖を促進するための行動である。保護施設の充実は生存率を上げ、医療関係の発展は高齢や新生児の死亡率の低下を意味する。

オスは溜め息を漏らした。

「一応市警では、表向き行方不明として処理しています。何しろ、被害者の身元が依然判明していませんし、遺体も発見のしようがありません。容疑者を全員逮捕するにしても、罪状が弱すぎて」

市内だけでも、毎日のように行方不明者は続出している。そのうちの半数以上は、結局見つからないままに終わる。そうでなくても自分で判断の出来る大人が、一晩か二晩帰宅しなかつた程度で、行

方不明と大騒ぎするにも問題があろう。

「ですが、昨晚からの行方不明者の中から、卿が目撃した被害者の身元を、現在急いで確認しております。家族がいれば、二、三日中にも捜索願が出るでしょうから、その時には……」

「そちらの方針の説明は後で。さっきの質問に答えてもらえませんか？ それと、女性の身元については？」

カーウィンにとり重要なのは、最後の質問だけだ。興信所の一つ二つに手を回すのも手だが、顔しか知らない女性の身辺捜査など、そうそう頼めるものではない。やはり基本的な捜査は、公的な権力を有する警察に任せるのが最善である。無論、警察の方針を知っていて損はない。

オスはすぐには答えず、似顔絵の紙切れを封筒に戻し、別の紙を抜き出した。

「卿の証言からだけでは判りませんが……。男の方の交友関係から、割り出せました。名前はミス・ジェニファー・アンダーソン。聖ブラウン孤児院の保母をしています」

孤児院の名を聞き、今度はカーウィンが内心溜め息をついた。

イムグリオイスト家の所有する孤児院である。管理は他人に任せ放しの状態だが、給料は家から支給されている。

驚きは表情の下に隠したつもりだ。しかし眼前のオスには通じなかった。

「知らなかったようですね」

カーウィンはかぶりを振った。

「まさか当家の雇用人が、犯罪と関係するとは……。そもそも、どうして彼女が……。彼……。と知り合ったのか……」

オスを『彼』と呼ぶには、かなりの自制が必要だった。

生理学では、脳内のホルモン活動が一部欠落した欠陥品。胎生学では、女性体になり損ねた失敗作。遺伝子学では、左右非対称な不良遺伝子を必ず一対持つ変異体。例え各分野の細分化を行わず、その基礎である生物学だけで見ても、生命の定義を満たすことすら叶

わぬ、ウィルスと同様の非生命体が、単体でオスと呼ばれるものの正体である。

そのような存在には、ヒト属でもそれ以外の属種でも『それ』で充分だろう。それを、ヒト属に限り『彼』と呼ばなくてはならないなど、生命体である女性に対する侮辱にも思え、神経を逆撫でする。

「……それは、クリスがその孤児院出身だからでしょうね」

これもカーウィンには驚きだった。柵の中の生活に満足できる、薄志弱行な個体を飼育するよう、言い含めておいたのだが。

「なぜ彼が、『異端審問』の犯罪に加担するようになり、彼女が協力するようになったのか、理由は判りません」

カーウィンの驚きを察してか、オスは付け加えた。

「理由はともかく、一応二人を監視する必要があるでしょう。特に彼は、別の行方不明事件とも関係している可能性があります。それがはつきりするまでは、こちらは何もできませんし、卿の行動を制限する権利もありません」

事件の存在すら疑わしいのだ。眉唾ものの件で、貴族はおろか、平民を束縛する権限を、警察は持たない。持っていたところで、そこまで手間をかけるかどうかは疑わしい。

オスは彼女の似顔絵も封筒に戻すと、その封筒をカーウィンに差し出した。

「卿の証言と二人の報告は、現時点で判別しているだけ、この中にまとめてあります。誤りがないか、確認しておいて下さい」

カーウィンは躊躇いながら、泥だらけの手で封筒を受け取った。

明らかに、いつもの態度ではない。容疑者の名前を告げるだけならまだしも、調べ得た報告書まで渡すというのは、公には違反である。警察への影響力を行使せず、こつも簡単に報告書を入手できるとは、裏で何か計画があるに違いない。警部の独断か、市警上層部の決定か、定かではないが。カーウィンの今後の行動にも何ら制限を加えず、同様の質問にも答えようとしない辺り、計画の存在を匂わせる。

いずれにせよ、尋ねるのは愚かな事だ。もし計画があるなら、教えるはずないし、場合によっては、掌の上で踊らされる危険だつてある。目的のために手段を選ばないのは、何も非合法組織だけに限った事ではないのだ。

「それで、いつまでに確認しておけば？」

「できれば今夜中に。明朝には回収したいですから」

難しい条件でないのは、封筒の重さから知れた。

「判りました。それでは、明日の九時以降には返せるよう、家の者に渡しておきましょう」

「お願いします」

オスは小さく会釈すると、用件は終わったとばかりに、帽子を頭の上に乗せた。カーウインに背中を向け、来た道に戻る。

警部の姿が植物の影に消え、ドアの立てる音から立ち去つたと知ると、カーウインはテーブルの上に封筒を放つた。

備え付けの井戸から水を汲み、手を洗いながら、ダールトンとか言う個体の正体を探る。

少なくとも、見た目通りの冴えないオスではなさそうだ。

第四話 孤児院

カーウインを乗せた馬車がイムグリオイスト家の門を抜け、夜の街中に出たのは、ダールトン警部が去り、一時間としないうちだった。

目指すは聖ブラウン孤児院、ミス・ジェニファー・アンダーソンが働く孤児院だ。

馬車に揺られながら、カーウインは読んだばかりの彼女の経歴を、頭の中で反芻した。

その内容に、思わず含み笑いを漏らす。

報告に目を通すまでは、彼女が何者か予想すらできずにいた。『インクイジション 異端審問』での追われる側と追う側が、表では雇用主と従業員の間に逆転するという、それだけの関係ではない。

五年前、彼女の姉が謎の失踪を遂げている。行方を知るのはカーウインだけだ。

そして現在、奇しくも行方不明になった当時の姉と同じ年になった妹が、同じようにカーウインの目に止まった訳だ。

偶然と呼ぶには出来過ぎた偶然に、何か大きな存在の意図を、疑いたくなる。

無論、『主』なる存在は、頭から信じていない。何かしらの永続性を求めたヒト属が、苦肉の末に創造した偶像を、後生大事に崇める趣味は微塵もない。宗教を完全に捨て去っていない理由は、貴族の名目を守り、世間からの信用を得るためだ。

脇道に逸れかかる思考を、元の軌道に戻す。

ミス・アンダーソンにどのような接触を図るか、具体的には決めていない。いつものように、一週間から一ヶ月以上費やし、相手の過去や行動パターンを調査した後、接触を取るような手段は、まず取れまい。彼女がこちらを知っているのは確実だし、行方不明になった姉との関連を、疑っている可能性すらある。

利点としては、彼女の過去を五年分調査するだけで良いところか。姉の知人という事実も、役に立つかもしれない。

だが、綿密な計画を立てるのは、カーウインの趣味ではない。杓子定規に計画に従う女性は、交際しても面白くない。交際するならば慎重かつ綿密に組み上げた計画に穴を開け、台無しにしてくれる女性であろう。もし用意周到な計画を立て、接近するならば、そういう意味で驚かされるのは、決して嫌いではない。

だからと言って、無為無策な通り魔や、手練手管に長けた本業の殺し屋扱いされたくはない。通り魔では相手の女性と知り合う機会がなく、殺し屋では操り人形と交際しているようなものだ。そしていずれにせよ、好みでもない女性と、交際しなくてはならない義務が増える。

交際し、気に入った女性だけを念入りに解剖する信条だけは、誰にも譲らない。

「まず、彼女に挨拶してから、かな……？」

彼女と交際するためでなく、孤児院の出資者としても、彼女を『異端審問』の犯罪行為から引き離すよう尽力する責任がある。彼女が警察に取りつかれては、後の交際に支障が出るし、孤児院と『異端審問』が繋がっていると噂されるのも、迷惑な話である。

二十分も馬車に揺られたところで、馬車は停止した。

聖ブラウン孤児院は、工場街の片隅に位置していた。地理的には、石炭や鋼材を運ぶ汽車が、昼夜問わず往復する鉄道を右手に臨み、鐵を打つ音の止まない広大な各種工場の敷地が、背後を占めるような場所だ。左手に建つ小さな古びた同名の教会は、工場からの煤煙でさらに薄汚れ、実際よりも古びた印象を与える。

正面の通りに行く歩行者は少ない。見かけるとしても、ほとんどは住む場所すらない浮浪者か、朝から夜遅くまで低賃金で働かされ、疲れた足を引きずる就労者ばかりである。どちらも瞳は虚ろで、希望も夢も無い、死んだ目をしている。経営者や貴族といった手を汚すことのない連中が、『ゾンビ』と侮蔑する行尸走肉である。

御者の開けたドアから路上に降り立ち、カーウィンはすぐさま形の良い眉をひそめた。

『霧の都』名物の濃霧と夜の暗さに、気の滅入るような光景を目にせずには済むのは有り難い。しかし工場の排煙なのか、近所のドブ川から立ち上る臭気なのか、腐食した重金属とメタンを混合したような悪臭は、霧では誤魔化しようもない。

濃霧を透かし、孤児院の名を記した煤で黒く汚れた看板と、煤で黒いシミの付いた窓越しに、厚いカーテンの隙間から光が漏れているのをカーウィンは認めた。

看板の横を通り過ぎ、ステッキの頭でドアを叩く。

すぐ側のカーテンが動き、誰かの顔が一瞬覗いた。カーテンはすぐに閉じられ、ドア越しにも、慌ただしい足音と怒鳴り声が聞こえてくる。最低三つの名が叫ばれ、たっぷり一分は待たされてから、ドアが開いた。

出迎えたのは、五人の女性だった。年齢は様々でも、全員濃い緑色のワンピースに、白いエプロンという恰好をしている。髪は頭の上で結わえ、白いキャップの下に隠している。

五人の女性のうち一人が、昨晚の『インクイジョン異端審問』の一人だと認め、カーウィンは上機嫌な小さな笑みを口元に浮かべた。似顔絵だけの報告でも、警察の調べは間違っていないかったようだ。彼女こそが、ミス・アンダーソンであろう。

「イムグリオイスト卿！」

五人の中では一番年長の、四十を越えた女性が、どこか卑屈さすら感じさせる恭しさで進み出た。

「あらかじめご連絡下されば、皆でお出迎えしましたものを……」前置きを並び立てる女性の言葉を、ステッキの一振りですら黙らせる。「別に、視察に来た訳ではありません」

この一言で、五人の表情に安堵の色が現れた。

多くの孤児院と異なり、採算を無視した完全な一個体の慈善事業なのだ。切り捨てられるとすれば、真つ先にリストに上げられるの

は避けられない。それだけに、スポンサーの視察には戦々恐々とするものらしい。万が一切り捨てられれば、すぐ外の通りを歩く『ゾンビ』が、彼女らの翌日からの姿である。

「それじゃあ……どんな御用で……？」

平身低頭する年長の婦人に即答はせず、勝手知ったる足取りで、事務室へと向かう。室内には他に彼女だけが入り、残りを外に置き去りにし、ドアを背後で閉じる。

カーウインは窓際まで歩み、ほとんど何も見えない外を背に、彼女に向き直った。丁度彼女が、デスクの上のランプに火を入れたところだ。

「この孤児院出身で、よろしくない噂を耳にしました。心当たりは？」

年輩の婦人は、眉をしかめた。記憶を探っているのか、演技なのか、別に重要ではない。

「さあ……。何しろ、百人以上がこの数年で独り立ちしていますから……。全員が全員、模範的な市民になった保証はありませんわ」。予想していた返答だ。場所が悪いと喚き、食事が少ないと文句を言い、嫌いな個体がいると暴れ、すべての不満の責任を管理する個体に押し付けるのは、ごく自然な反応だ。どれか一つの不満を取り除くため、収容できる個体数を減らしたところで、不満の種はいつでも幾らでも転がっている。横になったまま餌を食わせてもらい、動かずに下の世話までしてもらう無為徒食こそが、ヒト属の理想なのだから仕方ない。

そしてそのような理想的な生活を与えてくれなかった管理人、果ては社会全体にまで悲憤慷慨し、責任追及を称し犯罪に走る個体は少なくない。

「では、クリストファー・オブライエン、という名に心当たりは？」

「やっぱり、問題を起こしたんですね」

突然のスポンサーの訪問の意味が、ようやく納得できたとばかり

に、彼女は大きく頷いた。口振りからするに、孤児院でも問題だったようだ。

「何でも、悪い連中と交際している。そう聞いただけです」

カーウィンは正確な表現を避けた。ドアの外で立ち聞きされているかもしれない、それがミス・アンダーソンでない保証はない。カーウィンの独断専行に、ダールトンがどう反応しようと、この時点では大して問題ではない。

婦人は小首を傾げ、左手を顎に当てた。

「さあ……。卿がどのような噂をお耳にされたのかは存じませんが、親しい関係については……。まあ、犯罪に走ったとしても、彼なら不思議じゃありませんけど」

「と言うと？」

オスの経歴などに興味はなかったが、カーウィンは先を促した。ミス・アンダーソンを手中に収めるためなら、精子製造と散布のみが存在意義のオスのつまらない話にも、耳を傾け、苦痛に耐える価値があるかもしれない。

「自分勝手な子供だったんです。……と言うか、自己顕示欲の強い我が儘で、意見が通らなければ暴れるような、そういう意味です。ですけど……」

婦人は壁沿いに立てられた本棚に歩むと、無数の書類の中から、一つのファイルを取り出した。『クリストファー・オブライエン』と、名が記されている。

「これが彼の、ここでの業績ですわ。割られたガラスに、怪我をさせられた子供、近所の商店での盗み、警察に補導された経歴まで、すべて記録してあります。もし興味があるのでしたら、どうぞ、お持ちになって下さい。彼はこの孤児院の汚点の一つですわ」

最後の一言は、彼女の本心からの言葉らしく、吐き出すような口調だった。

理由はいずれとして、院で飼育する子供達は全員両親不在だ。大人に目をかけてもらいたい気持ちから、問題児という行動に繋がる

のは、別に不思議ではない。毎度のように問題を起こしていれば、確かに大人の注意を引ける。

あるいは、実際深刻な性格的欠陥を持っていたのかもしれない。どのような欠陥かは、まだ何とも言えないが。

雇用主に示すにはほんざいに突き出されたファイルを、カーウィンは受け取った。

「それで、彼と親しかった子供、あるいは親しい人物に、心当たりは？」

彼女の反応は、侮蔑と軽蔑を一つにまとめ、一息に吐き出す音だった。

「は。彼と親しい？　すぐに殴りつけるような相手に、好意を持つ子供がいるはずありませんわ。まあ当時は、気の弱い子供を何人か無理矢理従えていたようですけどね。ここを出てから、その関係は切れたのじゃないでしょうか」

要するに、群れのボスになる事が好きなオスらしい。

群れの頂点に立ちたがる本能は、社会を構成する生物なら当然の反応だ。ボス、もしくは第一順位個体なら、真つ先に気に入った女性を選ぶ権利から、餌の一番旨い部分を食する権利まで与えられる。同等の存在を拒絶する心理は、ここから発している。精子製造が存在の全てなのだから、交配できなければ意味がない。非生物と言え、肉体の維持には食物を必要とするのだから、食えなければどうしようもない。

それと同時に、なぜ『異端審問』に加担するのか、その理由も少し見えてくる。もし思考に進歩がないなら、の話だが。

群れの頂点に立ちたいなら、自分が一番強いと、群れ全体に証明すれば良い。そのためには、常に戦い続け、勝利していれば良い。万が一にも敗北する訳にはいかないから、自然選択される敵は、自分より弱い相手でなくてはならない。

しかし群れのどの個体でも勝ててしまう敵では、やはり説得力に欠ける。

その結果、選ばれた個体でしか勝利できない、架空の強敵が必要とされる。それがかつての『異端審問』と同じように、『吸血鬼』や『魔導師』であるのは、ただの偶然であろう。本人に何か別の強敵を想像する力があれば、『異端審問』に加わる必要はなかったとも、考えられる。

無論、婦人の証言からのみで、ここまで断定する訳にはいかない。ダールトンから渡された書類と合わせても、やはり心許ない推測だ。「でも、それだけで伯爵様がお越しになられるには、根拠が弱くありませんか……？」

婦人の指摘に、カーウインは頷いた。

「ええ。……彼……の犯罪行為に、この孤児院の者が協力している」とまで、噂されているようでしてね」

婦人は驚きに目を見開き、右手で口元を隠した。今にも卒倒しそうに見えるのは、大袈裟すぎる演技と、見えなくもない。

「まあ！ そのお話、本当なんですの！ まさか……この従業員がなんて……！」

従業員が加担しているとは、想像できなかつたらしい。

「噂です。あまり真剣に受け取らないように」

警察でも非公式でしか調査を始めていないのだ。余計な騒ぎは起こしたくない。だが同時に、ミス・アンダーソンが盗み聞きしているかもしれない期待を、言葉にせずふいにしたくもない。

「でも……でも……。卿がここに来られたからには、信憑性があるんでしょ……？」

胸に右手を添え、左手でテーブルに寄りかかる婦人の顔が、下からのランプの光で不気味に歪んだ。顔色が悪いように見えるのは、光の加減だけなのか。

「この件について、誰にも言わないように」

カーウインは質問に答えなかった。

「彼がここの出身者で、従業員に共犯者がいるとなれば、最悪の場合、ここを閉鎖する必要があるかもしれません。まだ余計な心配

を子供にかけさせたくありません。もし本当に共犯者がいるなら、今迂闊に騒ぎ立て、状況を悪化させたくもありません」

「ええ……ええ……。勿論ですとも……」

糸が切れた人形のように、何度も頷く婦人に、カーウインは冷たい青い瞳を向けた。

盗み聞きされなければ、会話が部屋の外に漏れたりしないだろう。婦人として路頭に迷いたくなければ、孤児院が閉鎖されないよう、協力を惜しむまい。それに同じ職場の女性が犯罪に加担してようものなら、最悪の場合芋蔓式に刑務所に行き着くか、良くても経歴書に傷が残る。

「僕がここに来た理由は、別に噂の真偽を追求するためや、貴女方に危機感を持たせるためじゃありません」

彼女の極端すぎる反応に、カーウインは補足を加えた。

「子供達が……彼……の自己中心的な計略に巻き込まれないよう、もう少し注意してもらいたいと、頼みに来たんです。万が一噂が本当で、従業員の誰かが……彼……に協力しているようですと、ここを去った途端、……彼……の手下にされてしまう危険があるでしょうから」

「勿論。私達共はずでに、子供達の安全に全力を尽くしておりま
すとも」

「それは判っています」

どこか自尊心を傷つけられたような顔の婦人に、カーウインは軽く微笑んだ。

「ですが噂が噂です。相手がどのような……男……なのか、そちらの方が良くご存じでしょう？　ここが犯罪関係に巻き込まれるのは歓迎できませんし、こここの出身と言うだけで、子供達が不公平な扱いをされたくもありません」

カーウインは言葉を切り、婦人の表情を伺った。

彼女にしても、孤児院出身の子供が、犯罪関係に従事するよりも、社会に貢献する人物となる方が、彼女の将来に有利に働く程度の考

えはあるはず。子供達を管理・教育してきた実績は、多少なり彼女の経歴に反映するのだから。

「せめて噂の真偽が確認できるまでで構いません。お願いできますか？」

「それはもう……。卿のご要望でしたら」

婦人は満面に笑みを湛えた。

カーウィン自らに依頼されるという事実は、信頼を寄せられているという事である。仮に噂が本当で、孤児院が閉鎖される派目になっても、ここでの働き如何では、何らかの特典を期待できる。新しい孤児院の設立する際、院長なり副院長の地位は、スポンサーからの信頼次第で手に入れられる。

「お願いします」

カーウィンは小さく会釈した。

「以上です。お手数かけさせて、すみませんでした」

「いえいえ。ここはイムグリオイスト卿の所有物なんですから。遠慮なさらないで下さい」

すでに窓際から離れたカーウィンに、婦人は即座にドアを開けた。盗み聞きをしていたらしい従業員の女性数人が、慌てて廊下を駆けて行く。

彼女達の中に、ミス・アンダーソンらしい姿を見かけ、カーウィンは内心笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7480y/>

虚栄都市～ヴァニティー・フェア～

2011年11月30日00時53分発行